

## 窓 まど 植生史研究と分類学では種の認識を共有できるか

植生史とは実に旨い言葉を見つけたものだと思う。そう感心する一方で、これを英語で何というのかと考えていくと、私自身、はたと答えに窮してしまふ。植生史研究の英文表題にあるhistorical botanyが日本語の植生史に合致する言葉かどうかは議論のあるところであろう。ところで英国では、植生史、彼らの言葉でいう floristic changes の研究が盛んで、多数の論文が発表され、研究者の層も厚い。とくに現在の植物相に通じる第三紀後期から第四紀にかけての研究がそうで、学問間の垣根に固執しないお国柄も手伝って地質学と植物学の両領域から興味あるアプローチが色々となされている。

私事で恐縮だが、私が座右に置く書中に次の二書がある。そのひとつは、1955年に出版されたJ. R. Matthews 著 Origin and Distribution of the British Flora で、出版元はロンドンの Hutchinson & Co. である。他のひとつは1975年刊の Sir Harry Godwin 著 The History of the British Flora. A Factual Basis for Phytogeography の第2版で、Cambridge University Press 出版である。前者はこの出版社が出している大学生向けの副読本 Hutchinson's University Library の一冊で、ロンドン大学の動物学名誉教授 H. Munro Fox 編集の Biological Sciences 中のものである。日本でいったら東大出版会の UP バイオロジーの一冊といったところか。また、後者は1956年に初版が出版された大著の第2版である。

手元に届く植生史研究の諸論文・報告を読むたびに、この二書のことを思い浮ぶ。個々の解析技術では、例えば木材解剖のように、この二書にはまったく扱われていないものもあるが、論の展開ではこれらの本に近い部分が大きいためであろう。そもそも英国では植生史に近い内容の研究は「植物相史」と捉えているようだ。もともと植物学の研究のひとつが植物相の解明から出発している英国ならではのことと言えそうである。変遷史は現在の植物相の成立の歴史を明らかにする研究にほかならないので、したがってそれは植物相の研究の一部と位置付けているとみてよい。

ところで植物相(フロラ)の研究では、所定の地域での種のリスト作成、今日の言葉でいえば地域多様性の分類学的解析(所定の地域に存在する種を決めること)が出発点であり、それは今も重要な課題である。しかし従来分類学者によって進められてきた植物相の研究は、分類学が、系統発生上での近疎とトポロジー分析にもとづく分類体系の構築、あるいは分類学的に同一種とされる個体や個体群についての緻密な生物学的解析に重点を移した結果、日本も含めて、分類学研究の対象外とされる傾向を強めている。このため、何々属や何々科の専門家という分類学者はいても、大台ヶ原や尾瀬や日本といった地域の植物相の解析は専門の分類学者の研究対象から遠退いてしまい、parataxonomistや生態学者まかせになってきている。

こうした研究動向の変化と相俟って、分類学で対象とする種の認識にも変化がおきている。とくに個体や個体群を対象とする分類学者の間では、種は、「単位」といえるような絶対的な概念というよりも、単なる操作概念に過ぎないと見みなされることの方が普通であろう。単一種とされる植物をとってみても、野外で交配する可能性のあまりない2倍体と4倍体が、形態上区別できなければ分類学上は同一の「種」として扱うが、これを研究する分類学者にとってはその2倍体と4倍体を区別して扱うことは不可避の問題である。こうした現実が判明している以上、「種」自体が構造をもつということは否定できない。こういう「種」の研究者にとって「種」はとても単位としては扱えないということになる。

私は、分類することとは、当該植物について既知の生物学的知識にもとづいて体系上での秩序を決めることだと考えている。秩序化にはいろいろな手法があるが、リンネ以来積み重ねられてきた体系的秩序化は生物学が脈々と準拠してきたものであり、伝統を重んじる立場からは軽んずることができないものである。つまりこの立場での新たな秩序化とは新発見による分類体系の再検討なのである。

分類学に軸足を置き、現生の植物相さらにはその変遷史までを視野に入れて自然史という言葉を用いる私だが、種という基本概念についての用法やこれを用いる意義にギャップが生じていることを日々増々感じる次第である。これは趨勢だとして一蹴してしまつてよい問題なのだろうか。もちろん分類学者もその点への配慮は最大限払っている。その一端は国際的な命名規約による体系化の統一である。また、分類学上の種が複合的であることが判明しても、分類学者の多くは、形態上区別できない限り、実在の交配個体群をそれぞれ「種」として扱うようなことを避けている。

「種」をキーワードとする枠組みを維持する上で、植生史はどのような貢献ができるのだろうか。それに関して思うことは、Matthews や Harry Godwin が上記の書で示しているように、植生史の研究者といえど分類学上の「種」についての深い理解と洞察が不可欠なことである。種の構造を解析する分類学の成果も、植物相や植物相の変遷を研究する立場の研究者に有意義な情報である。こうした状況の中で、誌上にしばしば登場する「何々 sp.」には苦言を呈したい。なぜそれが同定できないのか、それこそが重要な問題なのではないだろうか。「何々 sp.」の使用者の多くはこれまでそれにまったく答えていない。

2001年9月 大場秀章(東京大学総合研究博物館)